

地震災害を考える

江別から熊本へ派遣職員のリポート

4月14日から発生した熊本地震は、震度7が2回という想定外の直下型地震に見舞われ、多くの方が被害に遭いました。活断層で発生し、震源の浅い地震である直下型地震はいつどこで起きるかわかりません。私たちは、被災地に手を差し伸べるとともに、教訓として防災に取り組むことが大切です。

今回は、熊本地震で被災した建物の危険性を調査するために現地に派遣された2名の職員の報告から、地震災害について考えます。

熊本地震に見舞われ、被災された皆さまに心よりお見舞い申し上げます。



写真右／左の家屋は、地震で損壊して寄りかかった右側の空き家の重さに耐えているが、落下物などの危険により、危険状態と判定。写真左／アパートの壁に入った大きな亀裂を確認（いずれも熊本市内）

「待ってたよ」現地では、被災した家屋に住み続けてもいいのか見えてほしいと、住民から次々と声がかかりました。今回派遣された建築指導課建築指導係長の石原隆行さん（48歳）と建築住宅課建築係の青木智久さん（34歳）は、応急危険度判定士として、建物の被災状況を住民に詳しく説明しました。2人は東日本大震災での派遣経験もあり、北海道派遣団40名のメンバーとして4月23日から25日までの3日間で熊本市内49軒の家屋を調査しました。

想定外の地震甚大な被害被災度合いに落差も

「震度7を2回受け、建物の被害は甚大でした。内部の損傷もひどく、瓦などの落下物の危険も大きかった」青木さんは、想定を越える地震の恐ろしさを実感したといいます。一方で、建築物による被災度の違いも明らかでした。石原さんは「耐震基準が厳しくなってきたから建てられた木造は、被害が少なかった」と話し、耐震化の重要性を強調します。

江別市では、平成22年に策定した耐震改修促進計画のもと、施設の耐震化を進めています。今年中に全小中学校の耐震化が完了し、その他公共施設の耐震化にも取り組みます。一般住宅に対しては、木造住宅の耐震化費用の補助や出前講座の「耐震化セミナー」などを行っています（詳細次ページ）。

実感した人とのつながり地域での訓練の大切さ

「住民は不安な気持ちを抱えながらも支え合っていました」青木さんは、人のつながりの大切さを

建物の被災状況などを詳しく説明する石原さん。住民は真剣に耳を傾けます。



活動報告をする石原さん（右）と青木さん（左）

再認識したといいます。また、石原さんは訓練の重要性を訴えます。「事前に災害対応を考えておくことが重要です。自治会と小中学校などで連携訓練をすることで、地元で支え合う関係を作ることができます。災害図上訓練（DIG）などにぜひ参加してほしい」市では、防災に関する出前講座や訓練の企画提案などさまざまな情報提供などを行っており、その効果的な活用を呼びかけています。

育む助けあいの精神

「北海道から来た、それだけで多くの人に感謝された」と二人は口を揃えます。「どんな形でもいいので、助け合いの気持ちを届けることが、辛い思いをしている人の支えになるのでは」と石原さん。市内でも義援金の寄付など支援の輪が広がっています。

北海道で災害が起きたら、今度は私たちが助けてもらうこともあり得ます。災害に備えるとともに、助けあいの気持ちを育んでいくことが大切です。

（取材・編集 広報広聴課）

